

100年前 ポーランド孤児救済

「日本への感謝は今も

極東シベリアに取り残されたポーランド孤児が救済され1920〜22年に敦賀に上陸した史実をテーマにしたシンポジウムが9日、敦賀市きらめきみなと館で開かれた。史実を研究している2人が講演し、日本人が孤児を温かく歓迎した記録などを振り返るとともに、現代のポーランドの人たちと与えている影響についても考察。研究者は「今でも日本への感謝が根付いている」と述べた。

(藤田有美)



敦賀でシンポ 2 研究者講演

シンポジウムは、敦賀港開港120周年、日本とポーランドの国交樹立100周年を記念し、敦賀市が開いた。40年余りにわたって孤児救済について共同研究している、ワルシャワ在住のジャーナリスト松本照男さん(77)と、ポーランド国立特殊教育大のワイエスワフ・タイス教授(73)が

講演した。市内外の約1600人が聴講した。

松本さんは50年余りポーランドで生活している。現地の人々の多くは日本に対して良い印象を持っており、自身も親切に接してもらっていると説明。一方で、元孤児の子孫には日本での生活は孤児にとつて楽土だったと伝え聞いている人が多かったという。「当時から約100年が経過する今でも、日本への恩や感謝の気持ちがある」と話している。タイス教授は、孤児がシベリアから敦賀と米国を経由してポーランドに渡った道程について、複数の写真を用いて説明。日本での生活で笑顔を見せる孤児の写真や、孤児を手厚く支援した日本赤十字社の看護師たちの写真などを紹介した。また、元孤児への聞き取り調査では「日本は第二の祖国」との声が多く聞かれたことを紹介した。

120 敦賀開港
th Anniversary

＝9日、敦賀市きらめきみなと館
ポーランド孤児が敦賀に上陸した史実をテーマに開かれたシンポジウム